

ピカイチ先生の  
生活経営セミナー

2016年05月

お金と折り合う  
(② お金の時間を知る)

ネクストライフ・コンサルティング

〒975-0038

福島県南相馬市原町区日の出町167-3

info@next-life-consult.com



ピカイチ先生

ピカイチ先生

検索

# お金の歴史は、バブルの歴史 (1/3)

工場をフル稼働させ、製品を売りさばくには何とかしてアメリカ国民を「儉約」から「消費」へ向かわせる必要があったのです。こうして、消費を煽る広告宣伝という一大キャンペーンが始まりました。「どんなにモノを持っていてもまだ足りない」と人々に思わせることで、消費をするために働くという循環を作り上げていったのです。

このようにアメリカ産業界が打ち出した広告宣伝という作戦は、大成功を収めました。多くの労働者は時間を自分や家族のために使うより、より多くを働いて収入を増やす、そして消費を増やすために使うことを選んだのです。

我々は、そろそろ成長の呪縛から解き放たれるべきときに来ていると思います。経済が成長し、企業の収益が伸びないと人間は豊かさを手にできないという錯覚です。

(次頁につづく)

『「年収6割でも週休4日」という生き方』(ビル・トッテン)より

## お金の歴史は、バブルの歴史 (2/3)

一般には民間銀行はお金を預かったり、貸し出したりするところと考えられていますが、それだけではなく、民間銀行自身がお金を作っているのです。

経済学ではこれを「信用創造」と呼び、貸し出しによってマネーサプライ(通貨供給量)を増やすことを銀行の重要な機能のひとつだと教えています。

経済はなぜ毎年成長をしなければならないか、経済成長率になぜみんなが一喜一憂するのか、あなたは疑問に思ったことがないでしょうか。

その答えは簡単です。社会に流通するお金の80~90%が、貸し付けを通じて作られたお金であり、そのお金を借りた人(または企業)は利子をつけて返済しなければなりません。そのため経済は利子分だけつねに成長しなければならないのです。

そしてこの利子分は、実体経済における製品やサービスとは関係のないお金であり、国民の健康や幸福を増やすわけではありません。

(次頁につづく)

『「年収6割でも週休4日」という生き方』(ビル・トッテン)より

## お金の歴史は、バブルの歴史 (3/3)

民間銀行は、他の営利企業と同じように株式は証券取引所で売買されています。経営者は株価が下がらないよう、短期間で儲けを最大化する努力をしなければならない立場に置かれています。株価が下がれば、買収対象となったり、企業の存続そのものが危うくなったりすることがあるからです。

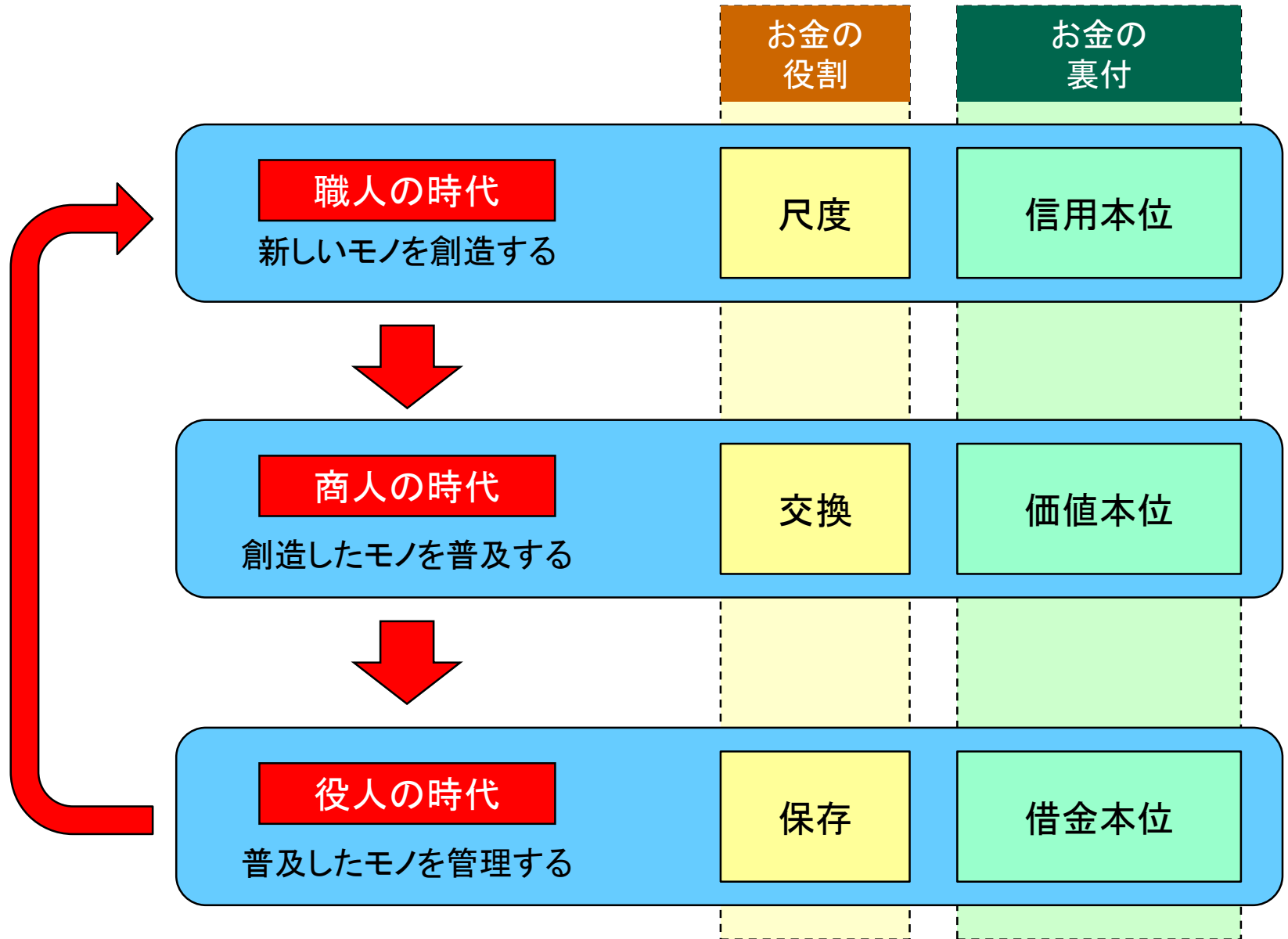
銀行は自分でお金を創造して、それを貸し付けることで利子を得ています。なるべく多くのお金を、なるべく早く創造したいという動機づけがあるのです。それは実体経済で必要とされる金額を上回るかもしれないし、国民の幸福や健康を満たすための製品を作り、販売するよりもずっと多くの金額になるかもしれません。

繰り返しになりますが、金融危機を防ぐために最低限すべきことは、銀行をきちんと監督するために1980年代以前の金融規制に戻すことです。それによって、マネーサプライを統制する能力を政府は取り戻さなければなりません。

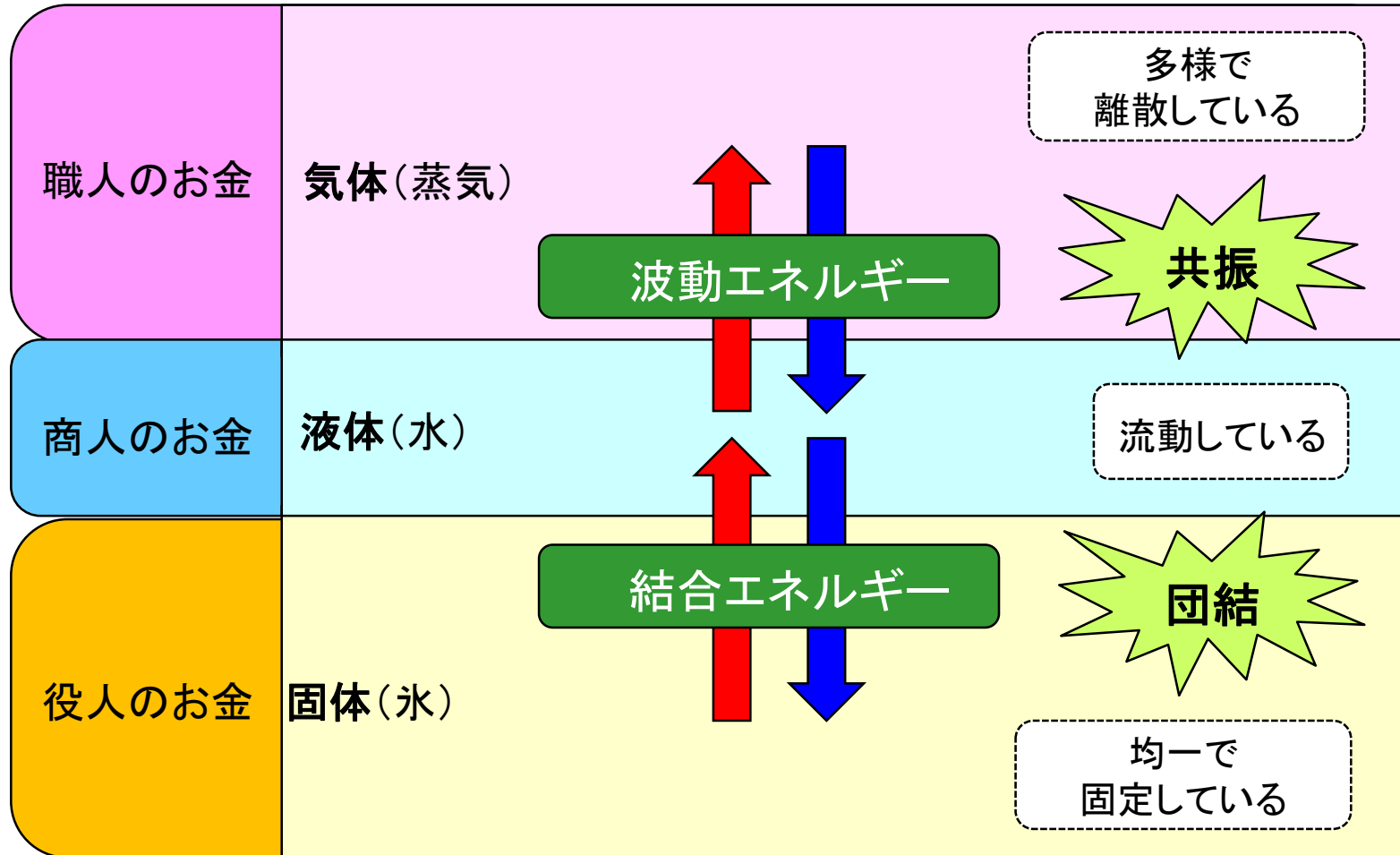
そして、お金を作り出す特権を、政府自身が取り戻さなければなりません。

『「年収6割でも週休4日」という生き方』(ビル・トッテン)より

# 経済の3つの時代



# お金のエネルギー交換



# フェイクマネーに踊る世界経済

世界のお金には2種類のお金がある。1つは“真水のお金”と言われる現金のことであり、もう1つは“フェイクマネー”と呼ばれる偽物のお金だ。

そのうちフェイクマネーは、信用創造によって生まれる。どういうことか説明しよう。

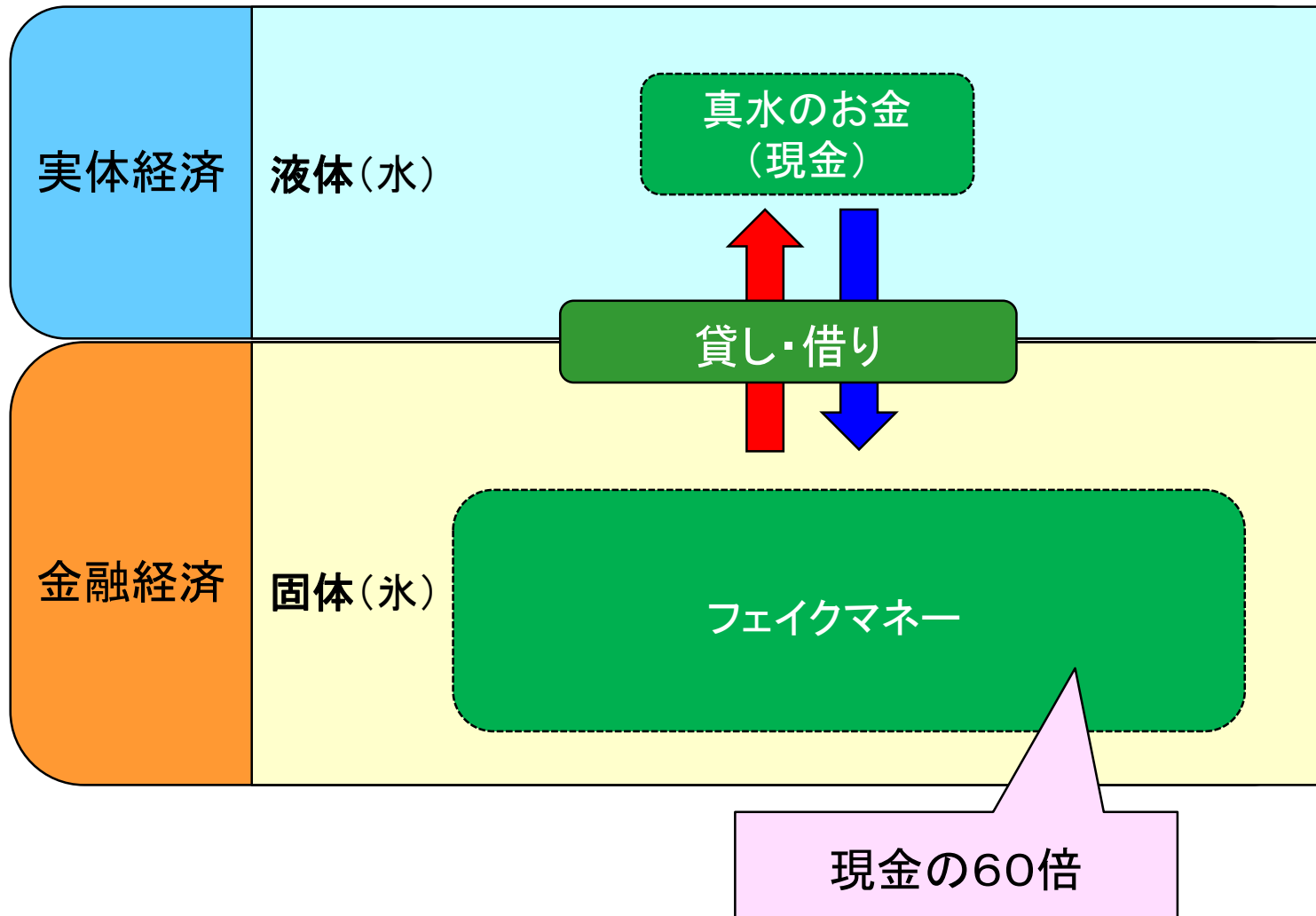
フェイクマネーは、たとえば株式取引で信用取引したり、不動産を買うときローンを組むことで生じる。その際、実際に現金のやりとりをするわけではない。あくまで数字上におけるやりとりがなされるだけだ。いわば架空資金とも言える。それがフェイクマネーの正体である。そしてバブル崩壊が起きたとき、真水(現金)がなくなったり、減ったりすることはないのだが、このフェイクマネーが一瞬にして消えてなくなったり、総量が大幅に減ってしまうことになるのだ。

現代社会においては、証券化やデリバティブなどのように現金を伴わない様々な取引手法が増えたことによって、世界のマーケットでは、真水のお金の60倍ものフェイクマネーが動いていると言われるまでに膨れ上がっている。そして、リーマン・ショックの際、真水の60倍もあったフェイクマネーが一瞬にして35倍まで減少したとされる。それだけのフェイクマネーが一挙に消えれば当然、その影響も大きなものとなる。

また世界中の銀行は24時間休むことなく、他の銀行との間でお金のやりとり(資金の貸し借り)をしているが、金融リスクが高まれば一斉に清算に出る。それにより、あったはずのお金がマーケット全体からあっという間に消えてしまうのである。

『世界経済の激変を1時間で読み解く』(渡邊 哲也)より

# 現代のお金とは？





## アナーキズムのすすめ (1/2)

お金のかかる趣味をやめて、これまでお金で買っていた物やサービスを自分の腕や脚でなんとかするようになると、その分のお金がかからなくなります。

これは、部分的にせよ貨幣経済から独立できた、ということです。部分的に資本主義から距離を置くことができたということであり、また部分的に政府の経済政策や財政政策の影響から離脱したということでもあります。

周囲の人と協力すれば、もっと大きなこともできるでしょう。

(中略)

ものをあげたり、もらったりしあうことで、そこにはごく小さな「地域経済」が生まれます。もちろん、ものばかりでなく技術や知識を交換することもできるでしょう。

近所の人たち、あるいは自分の仲間とともに小さな経済圏をつくると、その分だけ日本の経済、世界の経済、さらには政府から離れることができる。部分的に独立できるのです。

(次頁につづく)

『課税による略奪が日本経済を殺した』(ビル・トッテン)より

## アナーキズムのすすめ (2/2)

実際、友人同士で物々交換している限り、その「取引」に消費税はかかりません。政府が消費税率を倍にしたとしても、消費の半分を非・貨幣経済で賄うようにできればその影響は帳消しにできます。

金融海賊たちの活動によって再びリーマン・ショックのようなことが起き、収入が減ったとしても、あるいは日本政府の財政が破たんして円の価値が大幅に下がったとしても、物々交換は影響を受けません。あなたの畑で取れた大根は、昨日までと同じように友だちが造った味噌と交換できるでしょう。

(中略)

政治を変えられればそれに越したことはありません。しかし、たとえ政治を変えられなくても、自分と家族を守るために自分の腕でできることもあるのです。

政府のあり方を変えなくても自分の生活を改善することはできる。それが、私がすすめるアナーキズムです。政府の打倒を目指すのではなく、政府がどうなっても大丈夫な生活スタイルを確立することを目指すわけです。

『課税による略奪が日本経済を殺した』(ビル・トッテン)より

# ビットコインは分散型？

集中型

分散型

民間銀行系

FRB系

日銀系

IMF

ECB系

ビットコイン

ドル・ユーロ・円  
と交換できる

遮断

共同体系

地域通貨A

地域通貨B

志

地域通貨C

地域通貨D

ドル・ユーロ・円  
と交換できない

ブロックチェーン  
を利用

# 経営者は作業以外の仕事が多い

一歩進んだ農家は、種苗メーカーの実験役を買って出るようになってきている。試験中の品種を自分の畑で試しに蒔くことで、5年後にヒットするかもしれない新種のタネを先行栽培するメリットを享受するためです。

こうした新しい品種を複数栽培し、結果が良くても悪くても最低限、メーカーから委託料を手に入る。仕入れの段階から利益を生んでいるのです。

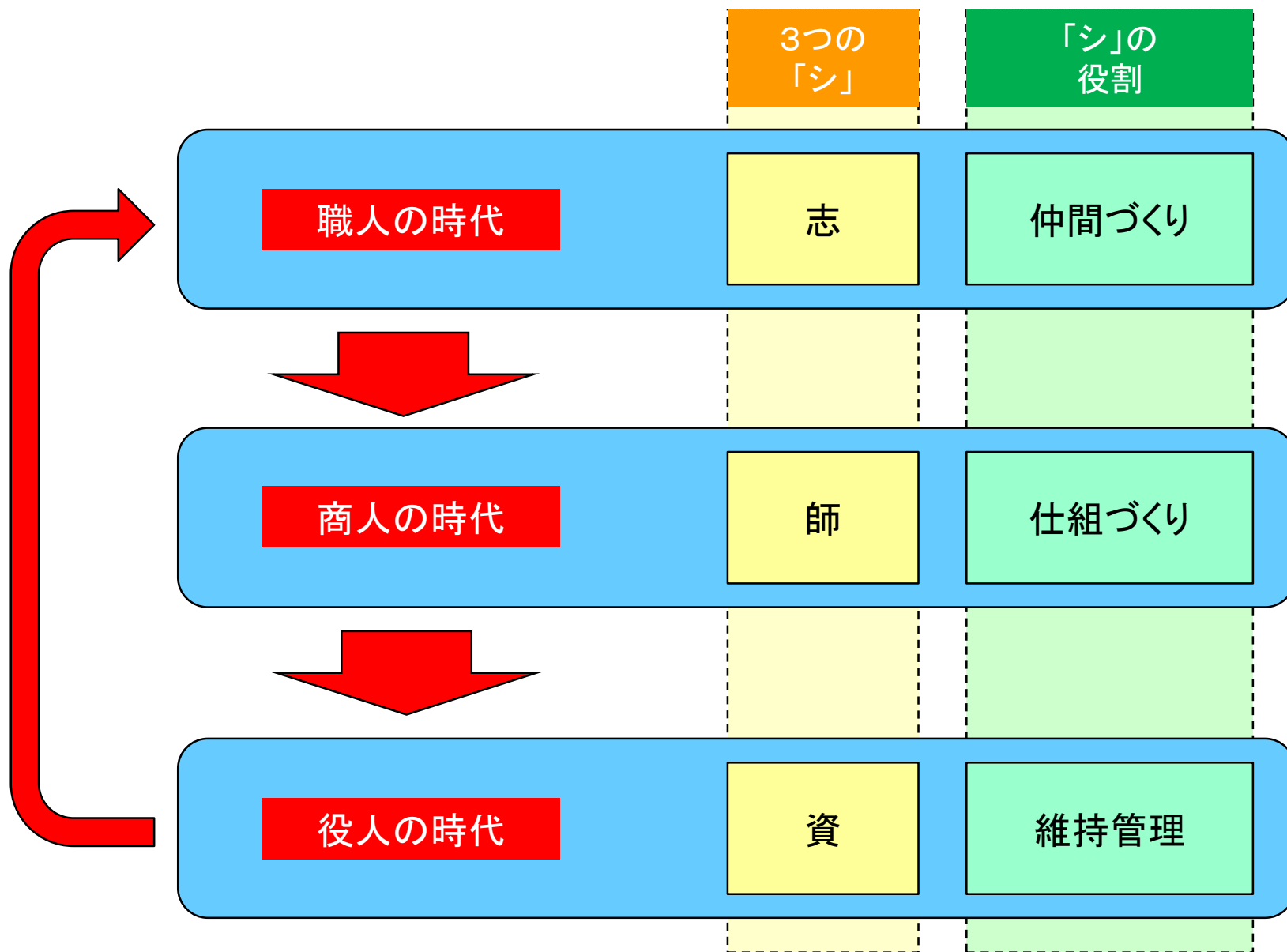
もしよい作物ができた場合、すでに5年間の栽培経験があるので、他の人が始めたときにはその品種のプロとして指導する立場に立っています。

誰でもがそうした立場になれるのではなく、種苗メーカーに見込まれ、信頼できる人物でなければならない。情報を外に出さないという信用も求められます。

他に先駆けて新しい品種を育て、他の農家が追随してメジャー作物になったときにはもう次のタネを試している超プロ級の農家もいます。

『農業で稼ぐ！経済学』（浅川 芳裕、飯田 泰之）より

# 事業に必要な3つの「シ」



# 江戸時代の職人

例えばドイツとかアメリカの工場地帯に行くと、本当にモノをつくっているだけで、営業という部署はないほうが普通だったのですが、日本は昔から小さな町工場でも営業がいた。

営業がいる利点は、お客様とじかにコンタクトするので、今度どういうものが欲しいという情報を集めてくることが出来た。それで日本の高度成長期に中小零細企業の中から大化けするような企業が続々と出てきた。

実はこれは江戸時代からの伝統なんです。江戸時代の職人には、自分の作業場にずっとこもっているタイプと、「職商人」といって、自分の手で職を持っていて、その職でつくったものとか修理したものを町に売りに行くタイプがあって、職商人という伝統が日本にはずっとあったんです。

ヨーロッパの職人は気位が結構高くて、そんなことは絶対にやらない。俺はいいモノをつくっているんだから、おまえら、買に来いという態度で仕事をしていた。

特に江戸の場合には、モノをつくる人と同じくらい直す人が多かった。修理に特化した人がずっと作業場にこもっていたらメシが食えないので、「おたくに穴のあいた鍋はありませんか」と御用聞きに行って、すぐ直す。

職商人の伝統があったので、日本は中小工場でも、客の動向をつかんで技術開発していたから高度成長期に発展できた。

『日本よ！農業大国となって世界を牽引せよ』（増田 悦佐、浅川 芳裕）より

# 政治の多数決（集中型）と経済の少数決（分散型）

これは私の昔からの持論なのですが、政治は多数決、経済は少数決で分かれているから、2つ合わせるとうまい落としどころが見つかるのだと思います。

政治の問題は、大勢が賛成するほうにすり合わせていけば、間違いがない。逆に、経済は誰もやらないことを最初にやった者が勝ちで、みんながやっていることだからやろうというふうに多数派にあとからついていく人には、めったに儲からないようにできている。

例えば、経済の論理で言えば「1人でできることを4人、5人でやっているのはもったいない。1人にまかせてほかの3～4人は別のことをやったほうが、社会全体として豊かになる」という発想をします。

一方、政治の論理で言えば「自分の影響力が及ぶ人たちの人数は、1人より4～5人いたほうがいい」ことになるわけです。

日本という国は、大体において政治の論理と経済の論理のバランスがいいほうだと思うのですが、でも農水省の支配下にある地域や農林漁業は、政治の論理が勝ち過ぎていますよね。

『日本よ！農業大国となって世界を牽引せよ』（増田 悦佐、浅川 芳裕）より